

## 展覧会について

時間という概念が生まれた時から、それを表現しようと様々な試みがなされてきた。時間は、抽象的な時間を知ることはできるかもしれないが、それを視覚化する困難さは大きい。

母袋俊也による様々な大きさの窓がつけられた、視覚体験装置「絵画のための見晴らし小屋」は、定点観測として持続的に眼前の世界を見ていくことにより時間を知ること、自然の移り変わりを知ることができる。と共に、切り取られた瞬間の彼方は現在ではあるが、切れ切れの過去の、記憶の総体でもある。このようにして彼方と此方のやり取りが始められ、表現へと移し替えられる。

彼はそのような装置を使って見える風景、とりわけ横長の窓から見える風景を、屏風から着想した複数のパネルが連携する絵画へと仕立て、TA系と名付けた。

本来、風を屏（しりぞ）ける機能を持って考え出された屏風は、そこに自然を表現することによって、風をも感じさせ、外の世界と共有される。しかしそこでは単なる再現が行われるわけではない。見たとおりに描いているのではなく、言わば表現者が思った通りに描いているのだ。抽象的であると同時に具象は保たれる。しかし、そこには外観から受ける思念は、内奥に生まれるものは、精神は表現されない。母袋俊也はそれを表現する。森羅万象の奥に潜む、見えざるさまざまな事象を表す。おそらく、彼の作品が静かに圧倒的なのは、ボードレールの言う「コレスポンダンス」を体現しているからなのだろう。

岡村 多佳夫（おかむら・たかお）／美術評論家